



2012 · 2

SORA 41号

行橋 安武 晨子

近くの木遠くの木にも懸大根

青空の孤独を癒す木守柿

折ればすぐ折るるもろさよ残り菊

歳月は句碑にもありし枯るる中

新暦ほのと幸せくるやうな

福岡 田代 貞枝

子等が来て家ぬくぬくと年の夜

午夜に入りまだ明明と年惜しむ

仕舞湯に身を沈めては除夜を過ぐ

入院の夫の座空けて雑煮膳

他愛なきことも一族初笑ひ

糸島 小林 朱夏

退院の赤子を抱く小春かな

児の頭より大きな乳房柚子香る

書初や赤子の手形足形も

凧や夜泣きをあやす子守唄

乳匂ふ春著の中の親子かな

大阪 田岡 千章

朝鴉や豆腐屋は戸を全開に

鷺掴みしたる榎櫃が香を放つ

盃に表面張力秋深む

達者かと一筆伊予の蜜柑着く

書込みの辞書は御下がり文化の日

東京 山田 正子

ウオツカ酌むアムール川は凍むばかり

記念日のワインあけるや冬銀河

風花や初音小路の迷ひ猫

湯たんぽに陽を溜めてある金物屋

下駄一つ冬青空に蹴つてみる

東京 古川 夏子

冬紅葉この頃鬼女のふえて来し

冬草や石垣低く積まれたる

冬麗の遠山襲の迫り来る

冬凧や机上の手紙未開封

冬日和坂の上より町の川



・ 第一回 「空賞」 受賞作品 ・

月の海

吉田 菫

虫干や父の遺せしチャタレー夫人

墓山に夏蝶の翅開く音

お嘶に飢ゑてゐしころ青葉木菟

雄鶏の仁王立ちする蟻の道

夏の川越ゆれば街の蠢ける

内親王の恋露はるる曝書かな

向日葵や板飛込の身が展く

無尽蔵の青春ありき百日紅

蟬捕りや式神混じる夕社

月の海へ子亀は子亀乗り越えて

さは言へど女の湯上がり梅擬

自転車の涌いて広がる秋の辻

菊人形身動きならぬ厚みかな

金柑や兄は喧嘩に負けて来し

垂直に蜻蛉眠る七七日

十五夜の畝どこまでも交はらず

秋の灯を奢れば羅馬終焉す

裏路地を急ぐ列車や天の川

やすやすと古里捨てし革手袋

鉄槌を打ち込む大地十二月

裸電球ことに激しく雪の寄る

鉄鉢にクリスマススの灯の零れたる

餅つきや男束ねる母の声

観覧車冬の銀河で停まりけり

羽子板の顔悉く横を向く

寒卵生きたる者の手の赫き

直線の都会に戻る春二番

拳骨の父を逃れし春の泥

蛇穴を出ればだご鼻地藏かな

一畳の御堂千畳の山桜

・ 第一回 「空賞」 受賞作品 ・

克己

小林 朱夏

薫風や授乳の胸に筋走る

番犬が鎖咬みをり半夏生

克己の額高きに掲げ夏期講座

神殿を納めてゐたる茅の輪かな

裏口の網戸を通る定期船

絞め足らぬ鶏が逃げ出す日の盛り

箱眼鏡無愛想なる魚ばかり

夕端居いつしかペンだこは失せて

蜘蛛の巣の主が獲物のやうであり

蟬落ちて歩く真昼のアスファルト

髪切つて残暑お見舞申します

撫で廻し弾き叩いて西瓜買ふ

朝顔の好きな色のみ種残す

曼珠沙華行つてはならぬ道のあり

母は身を流しに預け牛蒡削ぐ

白桃や柔の果肉に剛の種

猛禽の掴み去りたる秋の蛇

蓑虫のことあるごとに貌を出す

庭先で長居してをり石路の花

年の瀬の市場の声の殺気かな

勝つたびに傷の増えゆく喧嘩独楽

霜柱神妙に踏み地鎮祭

淡雪や新妻のやうに紅を引く

濡れ細りなにを啄む雀の子

一条のダムの放水春浅し

黒門の奥の日溜り桃の花

祝宴の少し落ち着き春の雨

春雷に共鳴したる鶏冠かな

花筏黄泉の入口まで行けり

死して蝶風に応ふる翅残す

空作品抄 — 柴田佐知子抽出



はじめから汚れてゐたる雪達磨
クリスマス雀に麵麩の大き過ぎ
漆黒の闇は海なり除夜詣
言ひつけを守る手毬の子の愛し
しぐるるや裾よりいたむ城の門

高倉 和子
中田 みなみ
荒井 千佐代
服部 早苗
柴田 志津子



煤払たれもみなくて捗れり

いま檻を出て来たやうな裘

信号も尾灯も真つ赤年詰まる

闘病や白鳥になる夢を見て

うたた寝の母は冬日に透けてみし

てきばきと紋付鳥の枝移り

病院に戻りてゐたる三日かな

鹿垣の内に人住み開拓地

どんど火の崩れ火柱昇天す

真向ひの大火事に窓震へたり

マスクして考へること止めし顔

輪飾に留守をたのんできたりけり

リハビリの足を廻して冬至風呂

だいじみどり

原 友子

矢野百合子

宮井知英

あさなが捷

鳳 蛮華

高倉恵美子

松田明子

苑 実耶

秋 千晴

青木朋子

山内 碧

吉村摂護

富士を愛で日向ぼっこへ加はれる

雪吊や松にしたがふ男たち

抽象の男具象の女秋深し

翡翠の青は後に捧げけり

青空の孤独を癒す木守柿

入院の夫の座空けて雑煮膳

児の頭より大きな乳房柚子香る

盃に表面張力秋深む

風花や初音小路の迷ひ猫

冬紅葉この頃女のふえて来し

懐へ水を差したる菊人形

信徒代表まづ荊冠の煤払ふ

鳶の背を見下ろすことも蜜柑山

野畑さゆり

亀井紀子

吉田 蓓

栗原京子

安武晨子

田代貞枝

小林朱夏

田岡千章

山田正子

古川夏子

松田明子

荒井千佐代

鳳 蛮 華



手作りのセーター拒む反抗期

時速十キロ坊ちゃん列車秋うらら

浦町の路地また路地の冬菜畑

母のものまこと母の香冬ぬくし

甕棺の朱の滲みたる蜜柑畑

マスクしてゐては語れぬことばかり

無花果のおちよぼ口にて買はれゆく

紐たるむとき宙返り猿廻し

早ばやと農事書きこむ初暦

年つまる遊び惚けて酒の席

髪切つてよいお正月をと言はれたる

凧揚げの恐ろしきほど吸ひ込まる

冬ぬくし八幡さまのお膝元

山田 正子

矢野 百合子

安武 晨子

宮井 知英

吉田 菫

織田 高暢

長 節 子

原 友 子

柴田 志津子

田岡 千章

今井 春生

秋 千 晴

栗原 京子

狐鳴く白一色の大地なり

寒昂皓齒のままに子は逝きぬ

日向ぼこ遠まなざしは待つごとし

「雨ニモマケズ」賢治となりて年暮るる

束の間の角の空地や寒鴉

初湯してさらに男と女かな

にぎはひの聖夜遠くて膝に猫

父の声聞かざるままや夢はじめ

腹の子の独り遊びや冬籠り

鶏の落葉を蹴つてゐるつもり

山峡の電車一輛片しぐれ

茶の花の二つ三つ咲き恙なし

もみぢ散る日照雨の残る鎖樋

あさなが捷

白水良子

戸栗末廣

桜三奈子

山内碧

亀井紀子

青木朋子

苑実耶

仲里奈央

池田華甲

野畑小百合

小川涼

石川叔子



茶の花の開きしのちもうつむいて
帯解いて母の顔なる雪女

かるたとり二人はきつと結ばれる
路地深く日差しとどけり石露の花
かみ合はぬおでん屋の扉を力づく
マフラーに隠す罪咎ウオツカ呷る

病む窓にかざして見する年賀状

部室から響くフルート鱗雲

灰色の響灘より冬帝来

隅々を知ることや憂し秋の月

妻きららふ葱こそうまし鍋料理

冬の日や驚くほどに脚弱り

金運も恋も半端な初みくじ

遠山のり子

小林朱夏

片田きく

清水量子

岸千手

古川夏子

田代貞枝

犬丸勝子

乾有杏

湯村栞

中原俊之

神谷耕輔

内藤玲二

空作品評

柴田佐知子

いま艦を出て来たやうな裘 原 友子

動物保護の運動が活発になってからだろうか、毛皮をまとう人が少なくなった。それにしても「今艦を出て来たやうな裘」とは痛快だ。

信号も尾灯も真つ赤年詰まる 矢野百合子

年の暮れの慌しさは格別である。歳末大売出しや、新年を迎える用品を売る年の市も立ち、交通量も多くなる。この歳末のごった返した季節感が即物的な景で切りとられている。「真つ赤」も歳末の色そのものに思える。鋭敏な感覚を感じさせる作品。

うたた寝の母は冬日に透けてぬし あさなが捷

お歳を召された母上であろう。「冬日に透けてぬし」によって、穏やかな冬の日差しの中の母上の姿と、それを見守る作者のあたたかい眼差しが見えてくる。(以下略)

はじめから汚れてゐたる雪達磨 高倉 和子

春にやつと根雪が溶けるといふような豪雪地帯であれば、純白の雪達磨ができるだろう。しかし和子さんの生地は福岡県の筑後地方。たいした積雪量ではあるまい。雪を土から剥がすようにして転がし丸く固めてゆくので、土の付いた雪達磨が出来上がるのだ。「はじめから」によつてどのような風土かも見当がついてくる。

煤払たれもぬなくて捲れり だいじみどり

年末の大掃除。なにやかやと人手があれば……と思いきや、現実はそうではないという。手をとる夫や子供がいまいほうが捲るし、誰も頼りにしないことで自分の気もぐいと引き締まり、やる気モード全開、てきぱきと勢いよく片付ける作者が見えてくる。

空集

柴田佐知子選



着せ換への途中菊師の昼休み

小津映画のやうな縁側冬ぬくし

母の忌の潮鳴りせまる白障子

長崎 荒井千佐代

目貼りせり心の罫も余すなく

島めぐる船の銅鑼の音クリスマス

蓮掘りの一服ひたひの泥乾き

信徒代表まづ荊冠の煤払ふ

聖鐘やしるがね長き除夜の水尾

小春日の溶けてつぶやく角砂糖

長崎 鳳 蛮華

里神楽大蛇を討ちて果てにけ

熊本 松田 明子

大柄の姫の手をとり里神楽

神楽果て火照る大蛇を畳みけり

太刀抜かぬ武將ばかりや菊人形

懐へ水を差したる菊人形

床下に神酒の空き樽山眠る

大根のひげ根しみじみ頼りなし

木枯や継ぎ目の粗き鳥居石

降臨の磬を仰げば鷹の影